

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

大学に必要なのは？この先必要になるのは？われわれが準備すべきは何？

青木 宗明

「そんなものまで大学に必要なの？」

四半世紀が経った今も、この言葉をなぜか鮮明に記憶している。わが経営学部の初代学部長の発した言葉である。何を指しての発言か、お分かりになるだろうか。

今やどの大学でも、まさに必要不可欠になっている施設である。もしもその施設が存在しなかったら、われわれ教員はもっと深刻な悩みを抱え込むことになるだろう。近年とみに件数が増え、学生にとっての深刻度も増していると感じられる事柄である。

そう、学生の悩みに向き合い、メンタル・サポートを行う学生相談室である。25年前、スタートしたばかりで施設の整っていない平塚キャンパスに、学生相談室を作ろうとしていたのである。ただし設置のイニシアティブは、事務局から出たわけでも、学部長からの指示でもなかった。

わが経営学部の良き伝統と言えるのかもしれないが、新しいアイデアは常に教員間の雑談や個々人の思いつきから誕生し、言い出した教員が回りのサポートを受けつつ実現を図るのであった。かくして学生相談室も、実現するためには学部長や事務局長を説得しなくてはならず、言い出しっぺの鎌田章先生（体育）と、三十路に入ったばかりで最年少の私が奔走していた。そこで出たのが、冒頭の発言なのである。

初代学部長の名誉のために記しておかねばならないが、箕輪先生の認識が時代遅れというわけでは必ずしもなかったと思う。最高学府である大学が学生のメンタル問題にまで対応してあげる必要などないというのは、当時はむしろ普通感覚だったように思われるのである。

実際、事務局の理解も容易にはえられず、実現までかなりの準備と折衝の労力が求められた。横浜キャンパスの学生相談室を運営されていた外国語学部の下

田先生や横溝先生に教えを請いに通ったり、当時の事務局長や次長と夜分に電話でネゴしたりするのもしばしばであった。

かような努力を認めてくれたのかは分からないが、1年近い時間を経て、ようやく学生相談室の設置が認められた。ただし、場所は現在の2号館2階の小部屋であり、中教室に取り囲まれているため、メンタル相談に訪れるには極めて不適切な場所であった。しかも専門カウンセリングのできる担当者の予算を付けてくれなかったため、たしか週に2日ほどしか開室できなかった。学生相談室は実現したが、人目を気にして部屋に入りにくい、閉まっている時間の方が長いほど、問題だらけだったのである。

これではいけない、せつかく作った意味がないということで、再び鎌田先生と対策に乗り出した。対策といっても、われわれに出来るのは、いつもながら手弁当のボランティアであった。すなわち、講義のない日や講義の合間に数時間、われわれ自身が学生相談室に詰めて、ドアをオープンにすることにしたのである。もちろん専門的なアドバイスなどできないし、安易にすべきでもないので、あくまでも相談の受付のみということで待機の時間を過ごした。

ほとんど来訪する学生もなかったのも、退屈が苦痛に変わり始めていたが、逆に深刻なメンタル・トラブルの学生が来るという想像も恐怖であり、いずれにせよジリジリとする2年ほどを過ごした。この時点で、奔走を始めた当初からの「絶対に必要な施設だ」という信念に揺らぎを感じなかったといえれば嘘になる。果たして大学にメンタル・サポートは必要なのだろうか？自問は続いた。

ただし、この揺らぎが収まって信念が確信に変わるのには、それほど長い月日は必要なかった。ほどなくして学生相談室の重要性が浸透しはじめ、現在の大混

雑する面談状況へと至る道のりが始まったからである。
かくして四半世紀前に念頭に浮かんだ信念は、幸いにも的に当たったわけだが、常に先読みが当たるわけではない。マーケティング教育が行われている経営学部だからといって、常にニーズを正しく推測・把握することなどできるはずもない。

しかしだからといって、的外れという失敗を怖がり、先読みの努力を怠ったりすれば、わが学部の競

争力は減衰し、何より学生達の幸福度が低下するであろう。いつになく真面目な主張をストレートな形で上げていて、我ながら自分ではないようで気持ち悪いが、学生達にとって何が必要かを常に考え、先回りして準備すべきは、われわれ教員の責務であると思うのである。

(所員/あおき・むねあき)

秋日雑感

Column

仕事柄 CM には人一倍関心があるのだが、今秋思わず溜め息をついた CM 関連のニュースに遭遇した。自動車会社の CM で家族らで小旅行をして夜に湖畔で天体観測をするというシーン。天

体望遠鏡の使い方、天体観察の仕方が前後逆というか対物部と接眼部の見方が逆だったという。まるで漫画みたいなオチである。SHC キャンパスの理学部廊下に掲示されている「天体望遠鏡 400 年」というポスターに掲載のカセグレン式反射望遠鏡とその CM の望遠鏡が似ているので、あれ、CM は間違っていないのではと思ったのだが、確認してみたところ CM の小道具(?)はニュートン式

反射望遠鏡。形は似ているが使い方が全聴者も凄いが、小道具さえも使い落第といわれても仕方ないだ

く違う。瞬時に誤りを発見する視こなせないというのではプロろう。

最近のネット社会ではネット依存が問題になっくないというのは人間の本めるプロセス軽視、学習努力会などといわれる近未来がかな

ことを懸念させる。何しろ若者からおホが握られているだからそれに頼り切るスマホ



Google 依存症とも言われている。面倒なことをした能だろうが、結果だけを求の忌避傾向は巷間 A I 社

り退廃した社会になりかねない年寄りまで手には"何でもできる"スマ

依存症患者とやらが続出するのも理の当然で

ある。いやいやスマホは傘の代わりにはならない、と言われたことがあるが、スマホは「ご主人様、午後から雨になります」と予報してくれる(実際には伝えてくれるだけとはいえ)頼りになるコンシェルジェである。

百歩譲って便利なツールを受け入れたとしても基本的な知識を持ち合わせていなければ将来につながる生産的な成果はもたらされないものである。基礎からの積み重ねがないがしろではいけないという教育に対する警鐘を一層高めていくべきだろう。人間がロボットに使われる A I 社会というばかげた喧伝が現実にならないようにするためにも。(行川)

【お知らせ】

<国際経営研究所後援 講演会開催>

◆ 地域経済講演会

日 時 : 11/25(金)13:30-15:00 1-250 教室

共 催 : 平塚信用金庫 神奈川大学経営学部

講演者 : 尾崎友彦氏

(平塚信用金庫 本店営業部 部長代理・中小企業診断士)

テーマ : 『中小企業の実態と地域金融機関の役割』

参 加 : 学内者自由

◆ 12/9 (金)13:30 平塚税務署講演会開催予定

◆ その他、国際経営研究所主催講演会なども今後予定しています。 —後日掲示予定—

2016 年度神奈川大学経営学部 第 11 回ビジネスプラン・コンテスト実施

平成 28 年 10 月 22 日（土）経営学部主催・平塚信用金庫後援によるビジネスプラン・コンテストが開催されました。

本コンテストは、学生がユニークで先進的なビジネスモデルを企画・プレゼンテーションをし、その優劣を争うイベントで、本年度は各ゼミから 9 チームの参加がありました。

審査員には、平塚信用金庫の 2 名と本学部教員に加えて、今年は監査法人デロイト トーマツより 2 名の方にご参加いただきました。審査は、①事業内容の独創性・新規性、②財務計画に基づく実現可能性、③プレゼンテーションの表現力・説得力の 3 基準にて厳しく評価をしていただきました。



【出場チーム】**

- ① Elmarry～理想の結婚式をあなたに～
- ② 和愛 輪会 ～日本を愛し、つながる輪～
- ③ Shine～午後からも頑張れる社員食堂を～
- ④ アオイユリカゴ～町工場で働き、町工場で育つ～
- ⑤ Linkle
- ⑥ 住めば金 っと大 Job
- ⑦ 民泊ビジネスの創出～宿泊施設の現状と提案策～
- ⑧ 防災！安泰！届けたい！
- ⑨ Our life

プレゼンテーションは、発表 15 分と質疑応答 10 分で行われ、審査員からは「企業理念」や「経営計画」、「資金繰り」などについての質問がありました。

今回の参加チームは全体的に学生らしい独創性や新規性が高く評価される結果となりましたが、

特に上位に選ばれたチームは、これらの項目に加えて財務計画などの実現可能性が評価される結果となりました。



コンテスト終了後には、成績発表と表彰式とともに懇親会が開かれ、参加学生と審査員による情報交換が行われ、本年度も盛況のうちに無事終了となりました。

今回のコンテストでは、表彰式の結果に涙ぐんだりする学生もいましたが、今回の経験は、今後の研究や厳しい就職活動をくぐり抜けていく上で大きな糧となったのではないのでしょうか。



【審査結果】**

- 最優秀賞 ⑦
- 平塚信用金庫理事長賞 ⑥
- 優秀賞 ⑤
- 奨励賞 ①②④

(国際経営研究所 常任委員／おおた・ひろき)

リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックを終えて

櫻井 美子

8月6日(日本時間)から始まったリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックは、たくさん感動とこれまでで最多となるメダル獲得という記録を残し、9月19日(日本時間)に閉幕した。着物姿で閉会式に登場した小池百合子都知事は、オリンピック旗を受け取り、次回開催都市である東京の紹介映像に、いよいよ4年後には東京オリンピック・パラリンピックが開催されると実感が沸いた人も多いのではないだろうか。私自身、ほとんどの競技をリアルタイムで鑑賞した。4年後は会場に足を運び観戦したい!と期待が膨らんでいる。

さて、今回のオリンピックで注目を浴びた選手のひとりが、カヌー競技スロラーム男子カナディアンシングルで日本人初となる銅メダルを獲得した羽根田卓也選手ではないだろうか。羽根田選手は高校卒業後にカヌー強豪国であるスロベニアに単身渡り、クバン・ミラン氏(スロベニア)と五輪のメダルを目標に二人三脚で歩んできた。決勝レースでは2位という結果で5人の選手を残し、最終選手のレースを待った。この時はひとつ順位を下げての3位、羽根田選手は静かに様子を見ていた。最終選手がゴールし記録が掲示された瞬間、銅メダルが確定した。羽根田選手はガッツポーズではなく顔を手で覆った。少し下を向きながら涙を流していた。外国の選手たちが羽根田選手に近寄り、肩を叩き称賛した姿はオリンピックの神髄と言えるのではないだろうか。彼は表彰後のインタビューで「父には10年前、オリンピックのメダルを必ずかけると約束したので、その結果を果たすことができ嬉しい」「日本はもちろんアジア初、この競技でアジア人がオリンピックでメダルを取るということは、本当に考えられなかったことなので、その快挙を僕が成し遂げることができて本当に誇らしく思う」とコメントしている。単身スロベニアに渡った際に必ずメダルをかけるという約束を父と交わし、金銭的な援助をお願いしたというエピソードを明かしている。長

い時間をかけてやっと得ることができたメダルは、羽根田選手だけでなく、サポートしたすべての人が報われた瞬間だったのではないだろうか。

私は今回のオリンピックで、選手それぞれのオリンピックまでの「過程」を少し知ることができた。それと同時に選手をサポートした人々の努力も垣間見ることができた。大会や試合は「結果」が重要なことは当然だが、そこに到達するまでにどのような「過程」があったのか、ということにもっと目を向けることで気付くことが多々あると感じたりオオリンピックであった。

最後に、宮本武蔵の五輪の書に「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす」という言葉ある。何かを体得、修得するためには時間がかかり、繰り返し稽古に励むしかないという意味だ。私事で恐縮だが、剣道を始めてもうすぐ35年となる。先人たちからは、「まだまだ若造だ」と叱られそうだが、いざ振り返ってみると胸を張って言える事がどれだけあるのだろうか、と考えてしまった。今回オリンピックで学んだ「過程」を大切にこれからも剣道と向き合っていきたい。

.....

2020年夏季オリンピック(東京オリンピック)

7月24日(金)~8月9日(日)

2020年夏季パラリンピック

(東京パラリンピック)

8月25日(火)~9月6日(日)

(所員/さくらい・よしこ)

編集後記

第51号をお届けします。今号では、青木先生、行川先生、大田先生、櫻井先生お忙しい中、執筆ありがとうございました。さて世界中を熱狂させた夏の興奮から、窓からは色づく葉、北国からは雪の便りが届いています。世の中も十年一昔であり、様々なところで変化が起きています。さあ、本格的な冬になる前に暖の準備をしないではいけませんね。(I)